

韓国における司法試験合格者の受験回想録の内容分析

——資格試験と大学教育の歴史—社会的様相——

比較教育社会学コース 朴 炫 貞

A Contents Analysis of the Reminiscences about the Period for Preparing the Korean Bar Examination in the Republic of Korea
-Focusing on the Socio-historical Linkage between Examination of Qualification and Education at Universities-

Hyun-Jung PARK

In this study, I analyzed the contents of reminiscences written by the Korean bars about their days prepared the Korean bar examination, named *Sa-Bub-Shi-Heum* (사 법 시 험, 「司法試験」), from the perspective of linkage between examination of qualification and education at universities. In the existing qualification system for the bars in Korea, there is no institutional linkage between the two. But, there are substantial linkages caused by the hierarchy of university formatted by the scores made by each freshman at the national examination for undergraduate admission. The informal resources requiring for pass the bar examination is different with the hierarchy of university. In other words, the opportunity for pass the Korean bar examination is not equal, even though there are no restriction of academic background apply for the examination.

〈目 次〉

1. はじめに
2. 問題の設定と分析の資料
 - 2.1 教育システムと資格試験制度のリンク
 - 2.2 分析の資料
3. 先行研究の検討と分析の枠組み
 - 3.1 先行研究の検討
 - 3.2 分析の枠組み
4. 回想録に現れた司法試験と大学教育のリンクの具体的様相
 - 4.1 大学入試と司法試験へのきっかけ
 - 4.2 大学の内外における受験資源
5. 仮説的領域の検証
6. 分析結果の考察
 - 6.1 「大学入試—大学序列—司法試験」の徹底的な連携関係の下での法曹養成
 - 6.1.1 大学序列による受験資源の格差
 - 6.1.2 入試試験による大学序列
 - 6.1.3 資格試験と入試試験
 - 6.2 大学の戦略としての受験支援
7. おわりに

1. はじめに

我がソウル大学法学部の学生たちは、ほぼ全員、例外なく、考試（司法試験）から自由にはいられない。ほぼ全員という表現を使った理由は、たとえ本人が考試の道を行かなくても、考試に受験するかに関する深い悩みは、一度ぐらいいはやっているからである。特に、ソウル大学法学部への入学が確定されたら、本人自身が、自ら、次なる目標を考試だと考える場合も多く、まわりでも、在学中に合格するのが当たり前であるという、相当に無理な期待をするのが頻繁である。また、入学した以後からまわりで聞く言葉は、「〇くん／△さん、もう受験を始めたんだって」などのことであり、先輩たちは、みんな受験で忙しい姿だけを見せているため、考試を意識するのは、本当に本人の意志とは無関係な場合も多い。それだけではない。最近では、考試の人気はさらに高まって、法学部出身じゃない人々も、どんどんこの戦場に参入してくる。その結果、ここ数年間、ソウル大学の非法学部出身が司法試験の合格者の中で占める割合の順位は、ソウル大学法学部に続いて2位になっている（権キデ他1997, 205頁）

これは、1997年、韓国で、エッセイとして、「ソウル大学法学部の学生たち」という単行本における回想録の一部である。共同著者たちは、全員、同学部の在学

生やOBの法曹である。本稿は、この回想録を素材として、その内容分析から、専門職養成における資格試験制度と大学教育のリンクについて分析を試みるものである。

2. 問題の設定と分析の資料

2.1 教育システムと資格試験制度のリンク

ある職業の専門職性を判断するための、重要なメルクマールとして指摘されているのは、(高等)教育システムと資格試験制度である(橋本2008)。これらの特徴をさらに探索していくと、まず、教育システムは、長期的なプロセスを通して、当該専門職としての業務随行に必要な知識やスキルを習得していくことを提供させる装置である。これに対して資格試験制度は、ほぼ1回の公的評価で、その職業への参入を許可させるのである。したがって、ある専門職への参入にもっと決定的なものを指摘するならば、資格試験制度であるといえる。

ここで、この二つの関係性、すなわち「リンク」の在り方を想定し、さらに議論を拡張させることができる。教育システムを、資格取得のための、より強力なリンクとさせるために最も効果的な方法は、その教育システムでのカリキュラムを修了することを、資格試験の出願への要件にすることであろう。典型的な例として、医師資格の国家試験がそうである。もう少し緩めた形では、当該教育システムを履修したものに、資格試験の一部を免除させることであろう。日本の旧司法試験が、法学部卒業生に対して1次試験の免除をしているのが、その例であろう。最も関連性のない形としては、出願の要件や一部免除などのつながりを、全く置かないことである。韓国のこれまでの司法試験は、その出願における学歴制限が存在せず^①、ここに該当する。

本稿で分析対象とする、従来の韓国の司法試験の合格者たちの受験回想録は、両者の間の関連性がない制度のもとで、司法試験に出願し、合格した者たちである。これらの合格者たちが回想する受験過程の中で、この両者の関係は、どのようなものになっているか。形式的には全くリンクがないが、実質的にはどうだろうか。もしリンクがみられるとしたら、それにはどんな特徴があるのか。そのリンクの具体的様相を抽出・分析し、司法試験と高等教育システムの韓国的特徴を明らかにさせることが、本稿の課題である。

このような課題のため、本稿では、まず司法試験の

合格者の学歴に関する統計資料を提示し、かつこれまで積み重ねられてきた、法学教育に関する韓国の先行研究を検討し、その検討結果から分析の枠組みを精緻化させる。

2.2 分析の資料

韓国の法律関連のマスコミである「法律新聞社」では、3年ごとに、韓国の法曹全員の学歴・経歴・職業を収録した「法曹人大観」を発行させる。この辞典の収録内容を分析しその結果を提示した、同新聞の2006年の記事によると、2006年現在、韓国の生存法曹の全体数は1万4,832人である。

これを、出身大学(学部基準)ごとにみるために、100人以上の法曹が出ている大学を提示した結果は、「表1」のようになる。表1から分かるように、上位17校のこれらの大学出身が、生存法曹のなかで占める割合は、非常に大きいものである。なお、この上位17校の内部を見ると、ソウル大学はほぼ半分ぐらいである。

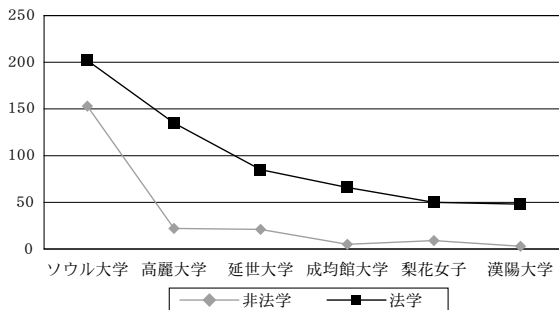
「表1」 現在の生存法曹の出身大学現状(2006年基準, 100人以上出身の場合)

大 学 名	人数	大 学 名	人数
ソウル大学	6,578	全南大学	191
高麗大学	2,306	中央大学	189
延世大学	1,087	建国大学	151
漢陽大学	747	韓国外国語大学	136
成均館大学	727	東国大学	112
慶北大学	307	嶺南大学	108
釜山大学	307	西江大学	105
梨花女子大学	249	檀国大学	100
慶熙大学	238	総計	1万3,638人

「法律新聞(2006年10月9日)」の記事から作成。

ところで、導入の部分で紹介したエッセイの内容には、非法学部出身もかなり受験していると書いてあったが、これに関する資料は次のようである。司法試験関連の大手の受験情報誌、「法律ジャーナル」の2008年の記事によると、2007年に司法試験に合格し、2008年に司法研修院に入学した1,001人のうち、ソウル大学出身は355人で、このうち43.1パーセントを占める153人が、非法学部である。そして、非法学部の専攻の数は、54個である。そして、この153人という数字は、2位の高麗大学の法学部出身と同数である。ちなみに、高麗大学の非法学部出身は、22人(高麗大学出身の合格者のうち14.0パーセント)であった。そして3位以下の大学からは、非法学部出身の合格者の

比率は急激に減る（「法律ジャーナル」2008年6月6日）。詳細は、「図1」のようである。



「図1」 司法試験合格の上位6大学の専攻別人数
(2008年の司法研修院入学者を基準)

「法律ジャーナル (2008年6月6日)」の記事から作成。

これらの資料によると、司法試験と大学教育は、たとえ制度的にはリンクがなくても、実質的な関係が全くないとは言い難い。すると、実際にどんなリンクが形成されているのか。本稿で着目するのは、司法試験の合格者たち自らによって作成された、受験回想録である。

通称、「合格記」と称されるこれらの受験回想録は、1956年創刊されて現在に至るまで、司法試験のための月刊の専門的受験情報雑誌として機能している「考試界」に掲載されてきたものである。これらの原文は、1980年以後のものから、韓国の学術論文検索サイトでダウンロードすることができ^②、日本では、東京大学の図書館を通して接続することができる。このサイトを通して、265件の受験回想録をダウンロードし、その内容を分析した。

受験回想録の内容は、概ねすべて同じような構成と内容になっており、その内容の構成により、次の4つの類型に分類することができる。

なお、その内容のうち、「成長過程の詳述」の具体

の内容は、高校時代までの成績、大学入試の経験、フレッシュマン時代の感想である。

以下では、法曹養成に関しての問題認識を提起している先行研究を検討した後、さらに分析の枠組みを精緻化させることにする。

3. 先行研究の検討と分析の枠組み

3.1 先行研究の検討

資格試験と高等教育システムが専門職のメルクマールであり、このメルクマールの各特徴とリンクの様相をさらに深くしてみる必要があることは、上述してきたとおりであるが、これに関する具体的な議論は、韓国で1995年度から始まった、法学専門大学院（ロースクール）の導入の政策過程の進行とともに、かなりの数が積み重なっている状態である。これらの研究は、その目的によって、①法学教育・司法試験の問題点とその改善のための政策的提案（安京煥1994、金正梧2003、金善洙1986、権五乗1994、崔鐘庫1994、申ビョン2006、裴鐘大1995、宋石允2000）、②法曹誕生の空間の分析（ソンヒョン1996、李国運2002）に分けることができる。

これらの研究が共通的に指摘していることにうち、司法試験と大学教育に関することを取り上げると、まず、①の領域からは、(i)各大学が、司法試験のためのカリキュラムを編成させているが、実際に合格できる学生は、全体の3パーセントにしか過ぎないということ、(ii)しかし、実際に合格されるためには、「受験村」の予備校の講義が必要であること、(iii)受験勉強だけに没頭する学生たちは、「文科系で最も優秀な学生として入学して、4年間ひたすら出世欲に捕りつかれたまま、現実には鈍感で、社会科学の基本的常識のないまま、鈍才になって卒業する」（裴鐘大1995、7頁）こと、(iv)最近では、自分の専攻とは無関係に司法試験の受験生になり、この受験熱はソウル大学だけでなく、全国の大学で現れている、などのことである。

司法試験！

一体、これが何であるため、「勉強ができれば法学部に行くべきで、法学部に行ったら司法試験に受験するべきで、受験したら合格するべきで、合格されたら裁判官や検事官になるべきだ」という社会通念が形成されているのか（金善洙1986、296頁）

法曹の誕生の空間を、「ソウル大学法学部の講義室」

「表2」 受験回想録の各類型と内容

区 分	①	②	③	④
回想録作成の動機				○
成長過程の詳述	○			
受験へのきっかけ	○	○		
受験の過程	○	○	○	○
感謝の言葉	○	○	○	○
類型ごとの小計	193件	48件	21件	3件
合 計	265件			

と「受験村の予備校と集団宿所」であると指摘しているのは、次の引用である。

第1段階（大学での法学教育段階）の典型的な場所として注目すべきところは、ソウル大学法学部の15棟201号室である。溢れる受講生を受容しきれず、廊下までをくっつけて、大規模の講義室を急造させたここは、（中略）司法試験の重要科目の講義の殆どがなされているということで、韓国の法律家が誕生される、最も重要な空間の一つになっている。（中略）司法試験に合格し、ごく少数に編入された人々の合格記（受験回想録）は、魅力的な神話として、官僚的出世主義によって汚染された殆どの大学生たちを誘惑する。法曹の世界で、ソウル大学の法学部とその構成員たちが享受する圧倒的な優位を知っているならば、大学生たちにとって、この講義室に入ってきて、著名な教科書の著者たちの講義を直接聴くということは、とても合理的な選択である。公式的／非公式的受講生たちは、法学部はもちろん、他の学部と他の大学、考試村（受験村）などから、この講義室に集まってくる（李国運2002, 166-167頁）。

ここで、「大学」ではなく、「ソウル大学法学部」と特定させていることには、注目される。現在の司法試験制度では、ソウル大学法学部を卒業することと、司法試験に合格することとは、何ら制度的なつながりはなく、その点、他の学生たちと「平等」な状態である。すると、なぜ、この論文では、大学と学部を特定させる修飾語が使われたのか。本稿の分析の目的は、この問いへの答えを提示させるためでもある。

3.2 分析の枠組み

先行研究の内容を、高等教育システムの視点から再解析すると、以下のように提示することができる。

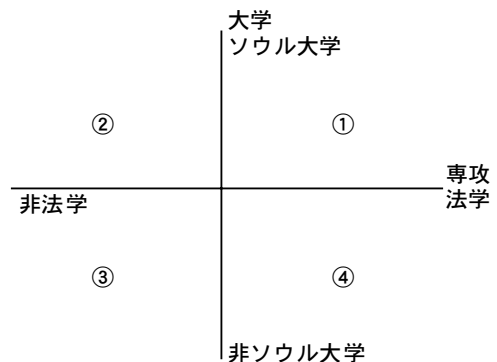
まず、高等教育システムへの入り口の段階としての大学入試である。法学部は、入学希望の殺到のおかげで、かなり優秀な学生たちを獲得し、特に、ソウル大学法学部は、その頂点にいらしい。次に、高等教育システムの内部である大学の特徴と、その外部に存在している予備校の存在である。そして、近年になるにつれ、法学部出身ではない学生たちの参入も増加している。

ところで、大学入試の段階を扱うにおいては、韓国の大学序列に関する研究を、参考にしておく必要がある。韓国の大学は、その学部新生が獲得した、年1回実施される、全国統一入学試験での成績の順位に

よって、非常に陰しく序列化されている。そして、この序列を分ける大きな要因の一つは、それがソウルに所在するか、それとも地方に所在するかである（李デュヒュ2007）。確かに、表1の結果をみると、このような指摘も参考にしておく必要があると言える。

したがって、以下では、受験回想録の内容の中でも、大学入試の段階、大学教育の過程、受験の過程に注目して、分析する。なお、この分析のために、これまでの合格者統計と先行研究で指摘されたことを踏まえて、受験回想録の作成者に関しては、その学歴の特徴に注目して、以下の仮説的領域を設定する。

分析の際には、まず、ダウンロードした回想録を、



「図2」 学歴による仮説的領域

この領域ごとに分けて、そこから特徴的内容を抽出し、他の領域と比較する作業をした。以下では、その分析結果を詳述する。なお、以下の各項のタイトルは、抽出された概念カテゴリーである。

4. 回想録に現れた司法試験と大学教育のリンクの具体的様相

4.1 大学入試と司法試験へのきっかけ

この段階の特徴としては、大学入試による、各大学・学科への「振り分け」である。「進学」という表現を使わず、「振り分け」という表現を使ったのは、韓国の大学入試制度の特徴によることである。大学入試のための全国統一試験が実施された後、個人の成績は、総点と総点による個人ごとの順位として表記される。この順位は、全国を受験生のうち何位かということと、その順位を、パーセンテージとして換算させた点数で表記される。このため、毎年の大学入試が終わると、必ず「全国首席」が出てきて、その全国首席の

インタビューは、全国的マスコミによる報道の対象になる。その報道で、全国首席が選択するのは、文科系の場合、ほぼソウル大学法学部である。

「学力考査の首席＝ソウル大学法学部」というのは、公式になっていた。毎年の冬、全国のマスコミを騒がせた、大学入試における「全国首席」たちは、ほぼ全員、「社会の正義を実現させたい」と言いながら、ソウル大学法学部に入学した。特に、1980年から1984年の5年間、全国首席の学生たちは、全員ソウル大学法学部に入学した。（「文化日報」2005年9月24日）。

このように、毎年の入試で世間の注目を浴びる人物を新たな構成員として受け入れてきた①領域の場合、共通的に、高校までの成績は非常に優秀であり、その成績のゆえ「当然」な結果として、法学部に進学された。この「当然」は、本人の希望であったというケースもいたが、周りで当然と思って、本人の意思に関係なく、時にはそれを捨てることを実質的に強要される形の勧誘・圧力を受けた結果でもあった。そして、結局本人たちは、それを「自分の人生のため」であると、受け入れることになるのである。

もともと、科学者になりたいという、変わらない夢があった…（中略）しかし、大学入学の願書を作成する日、その夢を捨てざるを得なかった。父が、法学部に行くのがいいと言ったとき、私は、「僕の意地どおりにします」と言えず、涙を流してしまった…（中略）法学部に入った後は、進路選択を間違えたと後悔したことはなかった。願書を作成する時に、流れる涙とともに、科学への未練も一緒に流されていたのだと思う。自分の意思ではなく、まわりの意志によって法学部に入学した人たちは数え切れないほどであると思われるが、その人たちに対しては、与えられた環境に早く適応するのが最善であると忠告したい。徹底的に法学部生になってしまうのが、悩みもなく楽にすごせるし、お得であろう（ソウル大学法学部、男性）。

そして、大学に進学された後は、高校生活からの解放感と新しい生活への期待感で夢に満ちていたが、「当然」と思われる司法試験の受験への「義務感」から自由にいられた人は、一人もいなかった。なかには、司法試験を、「法学部の専攻総合評価試験」であると受け入れ、その受験と合格を当然と看做すケースもいた。それとは対照的に、しんどい悩みの過程を通り抜けたケースも見られたが、それは、韓国で法学を勉強

し法曹になることが、これまでの政治的状況から、「社会への責任を放棄してしまい、個人的・世俗的出世だけを追求する姿」になってしまうのではないか、という悩みである。しかし、結局、法曹への道を歩むことになる。

なお、この領域においては、それまで試験なら最高の地位を自らの実力で獲得してきたものの、司法試験に対する「軽視症」もしばしば見られた。しかし、不合格の後、そんな自分の姿を徹底的に反省し、「謙遜な姿で」受験に挑む姿を見せていた。

これに対して、同じ法学部出身ではありながら、ソウル大学ではない、④領域の回想録では、回想録の最初に、「望みの大学」に入学できなかったルサンチマンが読み取られた。それゆえ、フレッシュマン時代を憂鬱に覚えている人が多い。勿論、韓国的高校では、耐えづらいほどの入試教育が行われるため、そこから無事抜け出したことに対する解放感を発散させる姿も、いくつかあった。

共通的に、④領域からは、大学入試で惜しくも「望む大学」に入れなかった悔みを持ち、それを、司法試験の合格で償い、それで自分の価値を取り戻そうとする傾向が見られた。たとえ一時的に息苦しい高校時代の生活からの解放感と自由な大学生活を謳歌する姿も見せるが、結局は、司法試験の準備をすることになる。

家庭の経済的事情で、望んでいた大学には行けず、母校に奨学生として入学しました。憂鬱な無念を残している状態で、入学式の日、大学の噴水の前で、決心しました。「合コンなんかしないぞ。在学中に合格してやる」。しかし、キャンパスに春の連翹が満開したころ、その決心は、自分も知らないうちに遠く流されました（中央大学法学部、男性）。

そういった態度からは、①領域のような「軽視症」などは見られず、最初から「聖戦」に参加するように、全力でかかる姿を見せ、①領域の特徴でもあった、司法試験と法曹に対する悩みは、発見されなかった。

しかし、司法試験への挑戦が、ただ大学入試に対するルサンチマンであっただけではない。それ以外の理由としては、幼い頃から法曹にあこがれていたため、が、最も多く、大学や社会での生活の中、法曹の職業的魅力を痛感したから、という回想も、しばしば見つけられた。

ところで、入学した大学の序列が、大学入学試験での獲得点数の順位と「一致」しない場合も、かなり見

つけられる。これは、家庭の経済的事情で、ソウル大学に進学することを諦め、大学の法学部の「考試奨学生」となって、授業料の免除と生活費の援助を期待して④領域、特に、ソウルの有力私立大学に入学するのである。

次に、法学を専攻してない②領域では、まず文科系の場合、法学部に進学するには、大学入試での成績がちょっと足りなかったため、現在の学科は不本意入学であったと回想しているケースが、何件あった。なお、理系の場合は、法学部に行けず不本意入学、という事態は、そもそもおこらない。

②領域の司法試験への出願は、(i)選択肢の一つとして最初から入っていたケース、(ii)自分の本来の専攻とその進路を考え直したため、(iii)他の専門職に従事していたが、自分の理想には法曹がもっと相応しいと考えたため、などであった。

この領域で注目されるのは、その経歴において多様であるということである。前職公認会計士、医師、航空宇宙工学の博士、物理学の修士などである。これらの人々は、「勉強・試験なら、小さい頃から自信があった」と共通して述べていた。

次に、③領域である。この領域に該当する人々は、大学時代以後に、法曹の職業としての魅力を感じていたと、述べていた。なお、家庭の事情が厳しく、中学・高校卒業後、社会人をしていたケースも、何件見られた。社会人をしている中、自分が生きていくためには、学歴・法曹へのアクセスの必要性を感じていたと、語っていた。

医師という職業を辞退したケース、理工系のエリート大学（韓国科学技術院）の学部・修士出身も、見られた。

医療保健制度に対して、個人的に不満でした。医師として、教科書で習ったとおり、精一杯治療すると、戻ってくる結果は、診療費の削減と過剰診療医師としてのレッテルが貼られる、そのような現実が不満でした。（中略）軍隊の服務のため、公衆保健医師として、拘置所で働きながら、犯罪者たちと接触するようになり、検事官たちとも話合うことが頻繁になりました。そうしているうちに、司法試験に関心を持つようになりました。（中略）だんだん厳しくなってくる我が国の医療制度と環境で、働きのやりがいを探せず、政府からの不当な制裁を受けながら医師の生活を続けるより、医療の紛争を迅速で解決できる、裁判官になることのほうが、やりがいがあることだと思いました。司法試験に挑戦することを決心したのです。3年のうちに

合格することを目標として、もし3年経っても合格できなかったら、諦めることにしました。1999年4月、公衆保健医としての服務が完了すると同時に、新林洞（考試村）に上京しました。家族の生計と二人の娘の養育は、妻に任せました。ひとりで、ソウルの新林洞の考試村で、お部屋を借りて、勉強を始めました（釜山大学医学部卒、男性）。

全体的に、高校時代までの成績と大学入試での成績、そしてそれによる進学可能な大学・学科と実際に進学された大学・学科を、自分のアイデンティティや能力観への最も重要な指標として設定させる傾向が強く読み取られた。そしてこの傾向は、後に続く受験生活にも影響を与えることになる。なおその影響は、主観的なアイデンティティや能力観にとどまらず、受験生活の資源に直接つながるものである。

分析の結論から先に言うと、このような資源には、学校歴、特に所属大学の序列による大きな格差が存在している。たとえ形式的には学歴による制限がないにせよ、実質的には、このような大学序列が原因となる資源による制約が存在するのである。言い換えると、所属大学は、ごく一部の上位序列の大学生たちには、司法試験への非制度的な支援リンクとして作用され、そうでない場合は、リンクとは言えない、むしろ制約・障害物として作用するのである。そして、その学歴の最も大きな規定要因は、前述の通り、大学入学全国統一試験で得た点数と順位である。

4.2 大学の内外における受験資源

まず、①領域では、大学の内部における公式的な支援制度は存在せず、そのため、学生たちが不満に思っていることもある。しかし、学生同士で自発的に組む非公式的な勉強会が非常に盛んであり、すでに合格しているOBたちも、非公式な場で、受験のスキルに関する助言を積極的に提供している。よくまとめられた受験書籍を借りてみることは、とても容易である。全体として、①領域は、一つの巨大な受験共同体のようなものである。ただ、大学内部での資源だけでは合格することができないため、キャンパス近隣の受験村の予備校や宿所を利用することは、必修になっている。

②領域の場合、司法試験の受験を決めれば、大学で法学部の授業に参加し、近隣の受験村を利用する。なお、この領域も、大学の内部に受験生活を送る人は多いので、非公式的な勉強会に参加できる機会が多い。これらの勉強会は、一度結成されたら、合格というゴールまで公的・私的なことを共有しながら一緒に過

です、一つの運命共同体のようなものである。

ところで、③領域と④領域は、さらに細分できることが分かった。以下では、この2つの各領域を、ソウルの有力／非有力大学、地方の有力／非有力大学の各専攻にさらに分けて、説明する。

まず、ソウルの有力大学の法学部の場合、大学の内部における公式的な支援施設が充実している。上述したような奨学制度の他に、「考試班」という受験施設、教員たちの特別講義、模擬テストなどが実施される。それらの利用は、合格のためには欠かせない役割を担っている。こうした公的支援を利用しながら、大学の内部で、受験生活を送るほかの同窓生とともに、勉強会を組んでいた。特に、入試での点数が高い大学ほど、①領域ほどではないが、「法学部に行くと、司法試験を受験するのがごく当然なものであったため（延世大学法学部、男性）」だという回想からも見られるように、非常に多数の学生が受験するため、大学の内部にいと、自然に受験の資源も得られる。もちろん、これらのケースも、ソウル大学近隣の受験村と無関係な生活をしていたのではない。受験村と大学の支援施設の両方を利用するのである。

1年生の10月の末頃、大学の「考試室」の改編があって、私は、考試室に入室される幸運を得た。考試室に入室することで、ともに勉強する仲間たちと出会い、新たな覚悟で受験生活を送ることができ、いい機会になった。入室の直後、すぐその雰囲気に慣れることができ、最終合格に至るまで、勉強の場所を変える必要を感じなかった。難問は、討論することで解決でき、受験の情報収集も効果的であった。室員同士で、勉強の方法や進度を比較しながら、自分のペースをコントロールすることができた。（中略）勉強に集中できるよう、物心両面で気を使ってくくださった先生方、同じ道を歩きながら、2年半の期間、共同生活を通して大変お世話になった虎賢亭（引用者注：高麗大学の考試室の名称）の室員たち、勉強会を通じて、アカデミックな側面で大変お世話になった、ホンジュン、ウンソグ（引用者注：同じ大学の同期生）にも感謝する（高麗大学法学部、男性）。

どの大学でやっているかによって違うとは思われますが、私が在学していた延世大学では、考試班の事務室で、先輩合格者たちの意見を参考にして、より受験適格的で、かつ、司法試験の採点の経験も持っている教授を選別して、それらの教授に、模擬テストの出題・採点・講評を計画させて進行していました。予想問題もかなりの確したも

ので、採点も、実際の司法試験と全く同じように行われていました。なお、講評では、どんな所が採点のポイントなのかを、教授が直接指摘くださったのが、本当に非常に役に立ちました。自分の生活のペースが崩れてしまうような危機にもかかわらず、この模擬テストのプログラムと講評には、決して欠席することなく、全部参加していました。そして、これこそ、私の合格の決定的な要因でした。（中略）この特講をしてくださった母校の先生方の恩は、一生忘れることができないでしょう。（中略）なお、我が全員合格勉強会にも、感謝いたします（延世大学法学部、男性）。

なお、非法学部の場合も、その利用資格においては制限がないため、自分の意思があれば、利用できるようになっている。「はじめには、周りでは受験生がいないため苦労したが、法学部に行ってみることで、段々受験のために必要なことを分かってきて、その後は、法学部に転科し、本格的に勉強することができた（延世大学）」という趣旨の記述は、かなり共通的に見られることができる。

次に、地方の有力大学のケースを分析することにする。これらのケースでは、やはり受験村と大学の支援施設を並行利用している傾向があるが、受験村はソウルにしかないため、上京せざるを得ない状況である。そのため、大学の在学中には大学の支援施設に、休学中と卒業後には上京する事例が、圧倒的に多い。上京すると、受験生活を送る同じ大学の同窓生たちもかなりいるので、一緒に生活することにもなる。

（休学して）、一人で新林洞（受験村）に上京した。（中略）大学に復学した後、講義テーブルも開いたりしながら過ごしていた。冬になって、1次試験の最終まとめのため、また新林洞に上京した。同じ考試院（引用者注：司法試験の受験生のための集団宿所）にいた、○兄、△兄、□兄、後輩の☆君など（全員大学の同窓生）と一緒に過ごしていた。（卒業した後）大学に残るより、新林洞にいる方が、より勉強に効率的であったため、また上京した。（釜山大学法学部、男性）

ところで、大学の同窓生たちと一緒に勉強会を組むことは、ソウルの有力大学のケースほど頻繁ではない。上記の著者の場合、勉強会は、「受験村の予備校で、勉強会を組むことになった。試験の合格を目的にその時に初めて出会った人々であったが、互いに助け合いながら、それなりに面白く勉強した。しかし、勉強会のメンバーのうち、私とジョンフン兄しか合格で

きなくて、申し訳ない」と、回想している。なお、大学の支援施設を言及する頻度は、少なくなっている。

その他、地方の有力大学も「考試奨学生」の制度やそのための支援施設を運営していた。しかし、やはり相対的な情報不足のため、卒業したら上京して受験村に入る場合が多い。言い換えると、ソウルに所在する大学の学生に比べて比較的貧弱な資源の中、上京とそれによる経済的負担までを背負いながら受験する傾向があり、そのような環境であるため、受験だけに集中できず、合格までの期間が長期化される傾向が読み取られる。要するに、ソウルの有力大学の学生たちに比べると、経済的余力と意志がさらに要求されるのであろう。

ところで、有力大学ではないところの学生たちは、どのような受験生活を過ごすことになるのだろうか。まず、ソウル所在の、非有力大学の法学部卒業の男性の場合である。

一番興味のあった刑法を、教科書の全体を2回読み終えて、もう終わりだという感じがしました。それで、模擬の予想問題で自分でテストをしてみたわけですが、結果は、暗闇の絶望感を味わってしまうだけでした。答えなかったことはもちろん、問題の内容さえもわからなくて、一体、受験のために何をやるべきだろうかとという心配と、明晰ではない自分への怒りで、数日もお酒をともにしながら、考試班の運営がよく出来ているという噂のあるK大学やH大学などをしきりに覗いていました。そうしているうちに、「考試界」という、月刊の受験情報誌を購読するようになり、そこで必要な情報と資料を得て、受験の方法論に多少近づくようになりました。それによって、最初からやり直すという努力をしなければならませんでした（東国大学法学部、男性）。

この回想録では、大学の雰囲気を、「就活で落ち着かない雰囲気」だと書いており、そうした中で、「私は周りとは異なり、必ず来年には合格してやるという覚悟で、午前5時30分に起きる生活をしていました」と、書いている。なお、この大学では、相対的に遅れた時期から、大学の内部で「考試班」が設置されるが、まだ新生のため、あらゆる資源には欠けていた。

新林洞の考試村や各大学の考試班では、勉強会を組むことがはやっていましたが、我が大学ではそれができなくて、知り合いの先輩と二人で、週末に会って一緒に勉強していました（東国大学法学部、男性）。

ただ、ソウルの非有力大学ではあっても、時間が経つにつれ、司法試験の合格者が多くなり、合格者の先輩が母校に出張し、積極的に指導することもある。しかし、やはりその場合も、有力大学の規模には及ばない。

なお、勉強会を組むことが難しいのは、地方の非有力大学の法学部の場合も、同様である。

私は地方大学に通っていましたので、(中略)まわりに司法試験を受験しようとする人もいなかったため、勉強会を組むことは最初から不可能でした。まさに、「地方大学生たちは、勉強の時には一人、遊ぶときには一緒、ソウルの大学生たちは、遊ぶときは一人、勉強のときには一緒」という状況でした。地方大学は、受験関連のすべてのことを一人でやっていかなければならないことが、厳しかったのです。周りに合格した人もなく、アドバイスを得ることなどできませんでした。また、老将の受験生(長い期間にかけて受験している人々)たちばかりで、試行錯誤は相当なものでした(嶺南大学法学部、男性)。

さて、この男性の場合、学部卒業後、ソウル大学大学院に進学した。その後の状況については、次のように書いている。

上京して、ソウル大学の図書館で勉強しながら、勉強会に参加されることができました。勉強会を指導してくれた司法研修院第25期の研修生たちの配慮と指導のおかげで、模擬テストが進行されるたびに、答案は段々体系的になっていった。

これまで、回想録の内容の各項目であった。以下では、この内容から、仮説的領域の検証と、それから得られる知見を提示する。

5. 仮説的領域の検証

本格的な分析結果の考察の前段階として、仮説として立てた4つの領域に関する検証結果を提示させよう。表3では、その内容をまとめている。仮説的領域は、③と④は、さらに細分させた。そして各項目は、これまで説明してきたとおりである。

これまでの分析の結果から、4つの仮説的領域は、実態と大きく異なっていないと言える。まず①領域は、他の3つの領域とは明らかに違う様相を現わしている。大学受験に対するルサンチマンを全く持たない

有一の集団であり、司法試験への出願は「当然」なものであって、「宿命」のようにまできている。その「宿命」に対して「悩める」有一の集団でもある。また、受験資源の面では、大学内部の公式的支援制度がない有一のところでもある。しかし、大学内部の非公式的な資源には非常に恵まれた受験生活を送る。

こうした特徴は、他の3つの領域では見られなかった。それぞれの領域をさらに細分することができるので、その数は増えてくるだろう。細分させるための決定的基準は、入学成績とそれを反映させている大学序列であり、大学序列の決定的要因として指摘されている、所在地域に関わってくる。

ここまでの結果を総合的に考えると、4つの仮説的領域は、入学成績とそれに対応した大学序列を代表しているのである。もちろん学科の序列もあるが、ここでの大学は学科も含む概念であると、とりあえず想定しておきたい。

「表3」 受験回想録の内容の分析結果

領域	大学入試へのルサンチマン	司法試験準備へのきっかけ	受験資源		
			大学内部		大学外部(受験村)
			公 式	非公式	
①	×	当然／必要性	×	◎	隣
②	○(文)／ 非該当 (理)	必要性／ 何となく／ 自分を信じ るため	×	◎ (一部、① と連携)	隣
③	ソ有	見返し／ 必要性	○ 試験班	○ 法学部を 利用	多少通学
	ソ非	見返し／ 必要性	○ 試験班	△	多少通学
	地有	見返し／ 必要性	△ 試験班	△ 法学部を 利用	上京
	地非	見返し／ 必要性	△ もしくは ×	△ もしくは ×	上京
④	ソ有	見返し／ 当然／ 必要性	◎ 試験班 試験奨学生	○	多少通学
	ソ非	見返し／ 必要性	○ 試験班	△	多少通学
	地有	見返し／ 必要性	○ 試験班一部 は 試験奨学生	△	上京
	地非	見返し／ 必要性	△ もしくは ×	△ もしくは ×	上京

そこで、以下ではこれまでの分析結果を整理して、まとめにかえたい。

6. 分析結果の考察

本稿は目次の2で記したように、専門職養成の二つのメルクマールといわれる（高等）教育システムと資格試験制度を取り上げ、そこに、この二つの特徴とリンクを想定することで分析を試みた。特に、リンクに関しての説明を、若干追加しておく。

教育システムと資格試験制度の分離という特徴からは、教育システムが、ただひたすら資格試験制度のための手段としてしか機能しない危険性を孕んでいる、と言うことができる。そのような危険性が現在化されるのは、おそらく、第1に、両者間に制度的繋がりがなく、第2に、資格試験自体で合格定員を設定させており、第3に、その資格試験に合格したら得られる職業の社会的威信が高い場合であろう。さて、韓国の司法試験は、この危険性現在化の3つの要件を全て満たしているため、資格試験への過熱された競争は当然であると言える。

しかし、3つの過熱への要件を満たしているとしても、統計資料から見られるように、実際の合格者の集計には、学歴によるリンクの存在可能性が推測された。これは、要件のうち、制度的リンクの不在の充足ということとは矛盾する。そこで、ここでは、関連の先行研究を参考にしつつ、受験回想録に記述された内容を分析することで、そのリンクの在り方を探索してきた。その探索の結果からの知見を、以下のように提示する。

6.1 「大学入試—大学序列—司法試験」の徹底的な連携関係の下での法曹養成

6.1.1 大学序列による受験資源の格差

これは、4年制大学を卒業すると同時に取得する「法学士」という学位の問題ではない。上位序列の大学であるほど、法曹への道は開かれているもので、下位序列の大学であるほど、その道は閉ざされているか、見えないものになっている。つまり、資格試験への出願の平等は、名目的なものになっているのである。したがって、法曹になりたければ、より上位序列の大学に進入するしかない、ということになっている。これは、目次の3で検討した、法学教育を論じる先行研究からは言及されてこなかったものである。それらの研究でしばしば言っている、「全大学の司法試

験予備校化」は、ソウル大学だけの現状、緩めてもそれ以下の2, 3校までの話である。

6.1.2 入試試験による大学序列

このような大学序列を決定させるのは、これまで指摘してきたように、全国統一試験での相対的順位である。大学入試は、この試験でより上位の成績を得て、より上の序列の大学に行くための手段になっている。たとえ同じ4年制大学といっても、入学した後に得られるものは、比べられないほどの格差を持っているのである。

6.1.3 資格試験と入試試験

上記の格差は、法曹という資格に進入するための関門である司法試験の受験にそのまま反映される。すると、司法試験における学歴の無制限は、文字通り名目的なものであって、法曹になりたければ、必ず大学入試に受験して、その試験ではできる限り上位の成績をとるべきである、ということになる。

これで、韓国の法曹養成においては、大学入試が、大学序列を通して、専門職養成にまで影響を及ぼす潜在的な機能を果たしている、ということができる。専門職養成の根源に、大学入試が潜んでいる、とも言えるのであろう。そうすると、専門職養成の根源的見直しのためには、大学入学の段階まで掘り下げていかなければならないことになる。実際、韓国でのロースクールの導入過程は、途中から大学入試政策と絡まって進行された。法曹養成制度の設計過程に「入試地獄の解消」という異種の 이슈が統合されたのである(朴2009)。

6.2 大学の戦略としての受験支援

分析の中から浮かび上がってきたように、ソウル大学を除く各大学は、司法試験に対する非常に多大な支援をしている。その支援の根底には、韓国社会における一元的価値観や職業構造の存在、そして、その頂点に、法曹が位置している、ということ、を、推定するに至った。これに関しては、韓国社会における「一元的は階層秩序の強固さ」(有田2008)の議論が、参考になる。「職業間に明確な地位の序列関係が形成されており、…このような階層秩序は、…高い地位獲得を目的とした競争には社会構成員があまねく参加することになる。そしてそのような汎階層的な競争参加により、地位の序列関係が再確認され、さらに強固なものとして再生産される(有田2008)」といわれるが、本

稿の分析対象である受験回想録からの内容は、まさに、このような競争が、法曹という地位の獲得をめぐって繰り広げられる様相を覗くことを可能にさせた。このような競争は、個人的上昇移動はもちろん、大学としては、「考試奨学生」「考試班」という制度を創設させ、我が大学出身の法曹をたくさん輩出させることで、大学の威信と序列の上昇を図ろうとしていることを、戦略として活用してきたということができる。つまり、「大学入試—大学序列—司法試験」の徹底的な連携関係の下で、大学側がとることのできる戦略である、ということになる。

7. おわりに

これまでの分析のように、韓国の法曹養成においては、「大学入試—大学序列(学校歴)—司法試験」の間に、徹底的・非制度的な連携関係が存在しており、その根源は、大学入試の際の、全国統一試験の相対的順位である。学歴・学校歴による無制限の「平等」な司法試験は、実際的には、現実とは切り離れたものであるため、韓国で法曹になるためには、大学入試の段階から頑張らなければならない、といっても、おかしくはない。もちろん、不屈の意志で、厳しい環境を通して司法試験に合格した、高卒以下の学歴の合格者や、下位序列の大学出身の合格者がいるということは承知している。しかし、そのような合格者がいる、ということで、だから司法試験は平等な制度である、と言い切ってはならない。その受験の過程は、これまで見てきたように、上位序列の大学の学生に比べて、一方的に厳しい環境、それもより長い受験期間を通らなければならないからである。

ところで、こういった「大学入試—大学序列(学校歴)—司法試験」の間の徹底的・非制度的な連携は、問題にされなかったのか。上記の仮説的領域で、①領域を除くすべての領域の回想録からは、「ソウル大学法学部の専売特許のような司法試験に挑戦する、私のような少数派のために、この回想録を書きます。どうかご参考になれることを祈っています(延世大学)」のようなところが出てくるが、こういった「状況認識」を超える、さらなる「抗議」は出てこなかった。かえって、「高校時代に勉強をしなかった」自分を自責する姿を見せていた。そういうことで、①領域を除くすべての領域から検出される、大学入試へのルサンチマンは、社会と教育の構造的特性への問題提起につながるのではなく、自分の能力や努力への問題につながって

しまうのが、もう一つの特徴であった。このような特徴は、何が原因で形成されたのか。韓国がたどってきた歴史社会的特徴から解決のヒントを得られるのではないかと推定するのである。

(指導教員 橋本鉦市准教授)

注

- ① ただ、2005年からは、高等教育機関で提供される法学の単位を一定以上取得することは要求されている。しかしこれは教育省から認可された予備校の授業でも取れることになっているため、この単位取得という制限は、学歴による制限とは言えない。
- ② <http://www.dbpia.co.kr>

〈引用文献〉

(日本語文献)

有田伸 2008, 「現代韓国社会における富と威信——社会階層論の視点から」 韓国・朝鮮文化研究会第9回研究大会シンポジウム発表資料, 2008年10月18日。

橋本鉦市 2008, 『専門職養成の政策過程——戦後日本の医師数をめぐって』 学術出版社。

朴炫貞 2009, 「韓国における法曹養成の政策過程——ロースクールの導入を中心に」 日本教育社会学会第61回大会発表資料。

(韓国語文献)

安京煥 1994, 「大学院教育の問題点と解決方策」 『法と社会』 48-62頁。

裴鐘大 1995, 「法学教育の改革方案」 『法と社会』 6-16頁。

崔鐘庫 1994, 「新たな学制と教育内容の摸索」 『法と社会』 23-34頁。

金正梧 2003, 「法曹養成制度の改革」 『法と社会』 83-117頁。

金善洙 1986, 「折ったページ」 『考試界通巻347号』 296-302頁。

権キデ 1997, 『ソウル大学法学部の学生たち』 東文社。

権五乗 1994, 「法学教育の改革と推進」 『法と社会』 101-119頁。

李デュヒュ 2007, 「大学序列体制の構造と解消方案に関する研究」 『教育社会学研究第17巻第3号』 131-157頁。

李国運 2002, 「韓国の法律家の誕生空間」 『ジャスティス第67巻』 154-174頁。

申ビョン 2006, 「21世紀韓国法曹の望ましい方向」 『公法学研究第7巻第5号』 179-210頁。

宋石允 2000, 「法律家養成制度改革の基本的方向」 『法と社会』 121-151頁。

ソンヒヨン 1996, 『考試村の文化と考試準備生たちのアイデンティティ』 延世大学大学院修士論文。